

上島町消防だより

これからの季節

「熱中症」に要注意

熱中症とは、暑い環境で発生する障害の総称で、梅雨の合間で気温が上昇した日や梅雨明けの蒸し暑い日など、体が暑さになれていない時期に起こりやすく、次のような病態があります。

■熱中症の分類と症状

○熱失神

炎天下の運動などで、皮膚血管の拡張により血圧が下がり、脳への血流が減少するため、めまい、失神が起こる。

○熱けいれん

大量に汗をかいているのに、水だけの補給を続けると、血液の塩分濃度が低下して、足や腕の筋肉に痛みとけいれんが起こる。

○熱疲労

脱水により、脱力感、倦怠感、めまい、頭痛、吐き気などが起こる。

○熱射病

体温の上昇により、脳や内臓に異常をきたすため、死亡率が高く危険な状態。反応が鈍い、言動がおかしい、意識がなくなるなどの意識障害が起こる。

「熱中症予防8カ条」

- ① 知って防ごう熱中症
- ② 暑いとき、無理な運動は事故のもと
- ③ 急な暑さは要注意
- ④ 失った水と塩分を取り戻そう
- ⑤ 体重で知ろう健康と汗の量
- ⑥ 薄着ルックでさわやかに
- ⑦ 体調不良は事故のもと
- ⑧ あわてるな、されど急ごう応急処置



※毎年のように乳幼児の車内置き去りによる死亡事故が報道されています。夏場の車内温度は、エアコンを作動させていても、駐車中のアイドリング状態では、約50℃まで上昇する場合があります。

たとえ短時間であっても、車内へ乳幼児だけを残すことは絶対にやめて下さい。



■応急処置



○移動

日陰で風通しの良い場所へ運び、衣服をゆるめて寝かせる。

○水分補給

意識がしっかりしていれば、水やスポーツ飲料を飲ませる。

○冷やす

体温が高いときには、濡れタオルや水で全身の皮膚をぬらし、あおいで体温を下げる。
(首・脇の下を冷やすのが効果的)

○マッサージ

血液の循環が悪い場合は、手足をマッサージする。

※熱射病の場合は、一刻でも早く医療機関で処置する必要があります。すぐに応急処置を行い、消防署へ通報をしてください。

現地視察をする委員の皆さん

小澤宏次(委員長)、松原彌一、池本興治、松浦明広、前田省二、近藤久治、檜垣秀明、中本峯一、岡野英二、大林清孝、濱田高嘉、上脇暢子、宮脇一男、中郷 浩



上島町消防庁舎建設検討委員会設置

一委員長に小澤宏次氏を選出—

上島町では、安心と安全のまちづくりの重点事業として、消防庁舎の建設を計画しています。

それに伴って、上島町消防庁舎建設検討委員会を設置し、4月19日に上村町長から委嘱状が交付されました。8月31日までの委嘱期間で、消防庁舎の建設場所や規模などの意見をとりまとめ、町長へ答申することになっています。6月9日(木)には、場所を選定するための現地視察を実施しました。

委員は次の皆さんとなっています。(順不同敬称略)



農業講座

しまなみ農業だより 太陽熱を利用した土の消毒方法

家庭菜園や家庭園芸では、限られた土地や容器で野菜や花を栽培していると思いますが、栽培した土をそのまま再利用していると栄養不足や病気などになりやすくなります。しかし、購入した培養土を1回限りで捨てるのはもったいないものです。夏の暑さの最盛期の太陽熱を利用した夏限定の畑やプランターなどの土の再生方法について解説します。

(1) プランターや鉢土の再利用の手順 (図1参照)

- ①土に残っている大きな根や茎を取り除き、移植ゴテなどで耕す。
- ②容器の排水口をふさぎ、水をためる (水がためられない場合は、肥料袋やプランターなど水がためられる容器に入れる)。
- ③透明ビニールシートで容器を覆い、盛夏期の日当たりの良い場所に置く。水が無くなれば追加し、晴天日に2週間以上置く (水をためることがポイント)。
- ④日なたに置く期間が済むと、水を抜く。
- ⑤ビニールシートに④の土を広げ、乾燥させる (あまり細かく砕かないこと)。
- ⑥腐葉土や完熟堆肥を土の容量の3割程度混ぜて土として使用する。

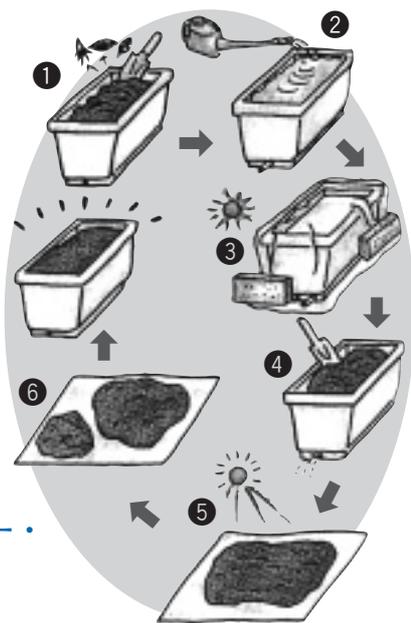
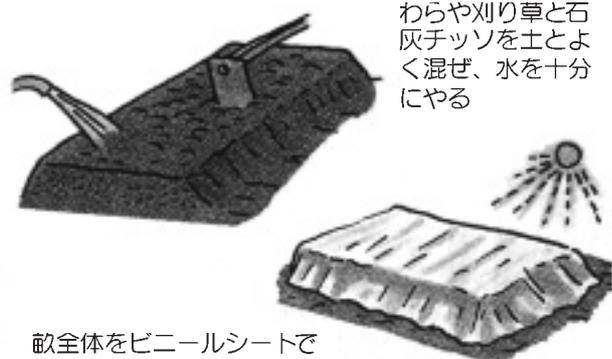


図1 プランター・鉢土の再利用法

(2) 畑での太陽熱消毒の方法 (図2参照)



わらや刈り草と石灰チツソを土とよく混ぜ、水を十分にやる

畝全体をビニールシートで被覆して1ヵ月ほどおく

図2 畑の太陽熱消毒法

- ①畑の中の大きな茎、根を取り除き、1㎡あたりバケツ2杯程度の「わら」や「枯れ草」と石灰窒素(100g)をばらまいて深く耕す。
- ②水をたっぷりともいて透明ビニールシートで「うね」の表面を盛夏期に1ヵ月以上覆う。米ぬかやフスマ(ビールの絞りかすを乾燥させたもの)を1㎡あたり1kgすき込むとさらに土の消毒効果が現れる。
(注意) 水が少ないと土の温度が上がらないので、周囲に土を盛り十分に水をためるぐらいに水をいれる。
- ③1ヶ月以上被覆後にビニールシートを除けて、土が十分乾いたら耕して通常どおり肥料をやり栽培する。

(3) 最後に

畑では、夏作を休んで行うため、センチュウや病気の発生が多い時に行います。プランターや鉢土は、土をリサイクルしながら有効に活用できるため、自然に負荷をかけない土の消毒方法として取り組んでみてください。なお、冷夏の場合は効果が十分現れない場合がありますが、米ぬかやフスマを活用すると効果が安定するようです。重複しますが、水をタップリと土にためることが効果をあげるポイントです。不明な点は、しまなみ農業指導班 村上までお問い合わせ下さい。

(しまなみ農業指導班 TEL 72-2325)